



行政と市民の関係を創造する

NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会会報
106 号
2019/6/7発行人 梶 宏 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809
TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp

会の三本柱 今年度も研修会、第三者評価事業、広報 充実した取り組みをめざします！



2019 年度の通常総会がさる 5 月 18 日（土）午後 1 時 30 分からひと・まち交流館京都の会議室で開催された。

司会の伊藤理事の開会宣言後、梶理事長から「当会は来年で創設 20 周年を迎えることとなります。最初どうなることかと思っていたが、ここまで会が発展したことを喜んでいますが、最近、若い会員が 3 名入会された。私自身、高齢者となり体調不良の時もあるが、今後できるだけ社会とのかかわりを持ち、市民団体としての役割を果たしていきたいと考えています」との挨拶があった。

議長に稲葉晃治会員が選出された。総会は出席 29 名、委任状 28 名計 57 名で会員総数 78 名の半数を超え、総会が成立していることを確認、議事に入った。

小栗事務局長が第 1 号議案・2018 年度事業報告、第 2 号議案・同活動計算書を報告、齋藤はるみ監事から監査報告があり承認された。

評価すべき活動として、研修会が年間を通して定期開催されたこと、介護・福祉サービス第三者評価事業において 22 事業所から受診申し込みがあったこと、内容の充実した会報の定期発行とホームページの刷新、そして他団体との連携による「よりよい介護をつくる市民ネットワーク」の活動と行政への提言などが挙げられた。

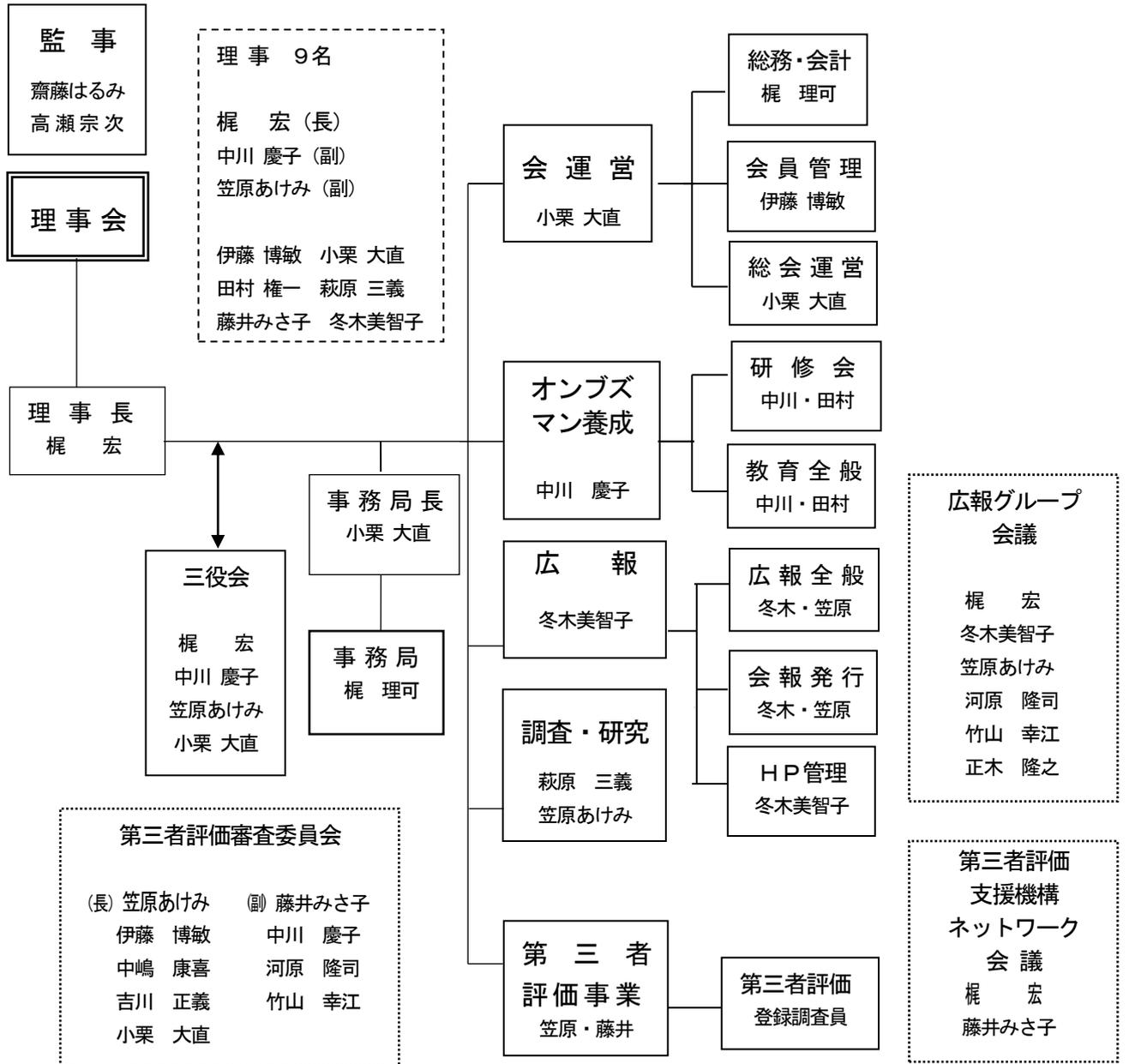
次いで小栗事務局長から第 3 号議案・2019 年度事業計画案、第 4 号議案・同活動計算書案が提案され賛成多数で可決された。会場からは、「決算がマイナスになっていることが気にかかる、会員拡大がもっと必要」「介護保険を切り口にした市民団体は、全国的にもないのではないか。ネット検索しても見つからなかった」「ホームページをベースに若い人にも発信すべきではないか」等の意見が出た。

第 5 号議案・役員を選任が提案され、承認された新理事冬木会員の挨拶があった。稲葉議長の軽妙な議事進行で総会は約 1 時間で終了した。引き続き、総会記念講演会があり、多数参加された一般市民の方とともに、講師早川さくらさんのお話を聞き、その後の活発な質問や意見交換で大いに盛り上がった。
(中川慶子 記)



きょうと介護保険にかかわる会 組織・業務担当図

(2019年6月6日 理事会決定)



理事・副理事長退任挨拶

◆竹山幸江

かかわる会に入会して 10 年が経ちました。介護相談員として梶さんと一緒に施設訪問をしたのがこの会を知るきっかけでした。介護相談員活動をするにあたり、研修会は高齢者福祉を広い分野から眺めることができとても参考になりました。

理事としては広報と副理事長を担当しました。毎回の編集委員会は紙面作りの苦労もありましたが、それを上回るほど楽しく幸せな時間でした。入会して最初に取り組んだのは、10 周年記念誌でした。いよいよ来年は 20 周年を迎えます。今後市民オンブズマンとしての活動はますます必要になっていくことでしょう。かかわる会が 20 年、30 年と続いていくことを願っています。



事務局員退任挨拶

◆建部信子

梶理事長とのご縁で事務局を担当しました。当初 PC のワードが少し得意分野でエクセルは、苦手ででしたが、『会計ソフトに記帳できれば OK』という言葉信じお受けしましたが、具体的な引き継ぎはなく、繰越金とソフトを受け継いだのみでした。自身の判断で方法を考え、孤軍奮闘、今ではエクセル（関数）が得意分野となり、嬉しい収穫となりました。総会関係等は退会された事務局長 F 氏に道筋を立てていただき今に引継いでおり、感謝しています。

決算事務は税理士、HP 作成はプロに依頼していましたが予算が無くなり、ガタガタのこの肩に背負い込みました。

記憶力に自信のなくなった今、信頼のかけるよき後任にバトンタッチができ心強く思います。

10 年間、ご協力ありがとうございました。

副理事長就任挨拶

◆笠原あけみ

この度副理事長に就任いたしました笠原あけみです。会員の皆様と共に、京都市の介護状況が今よりも少しでもよくなるよう努力していきたいと思っています。介護を利用する側、提供する側双方にとって、当法人のスローガン「安心できる介護・納得できる介護保険・信頼できる制度」になるよう、微力ながらも関わらせて頂きたいと存じます。ご指導、ご支援よろしくお願いいたします。

理事就任挨拶

◆冬木美智子

2040 年には高齢化率が 36.8%（現在は 28.1%）となり、医療・介護ニーズの増大に対し労働力および財源不足で、社会保障が破綻することが懸念されています。私はその時〇〇歳だから逃げ切れる？ いえいえ現状でさえ、介護保険や介護サービスの実態を知れば知るほど「なんだかなあ」と思うことが多いし、子ども世代にはさらに苦勞させることが、気が気ではありません。「安心できる介護、納得できる介護保険、信頼できる制度」を実現するために何ができるのか。みなさまと一緒に考えながら歩んでいきたいと思ひます。

事務局員就任挨拶

◆梶 理可

この度事務局を引き継ぐこととなりました。昨年から少しずつ建部信子さんより、事務仕事を教えていただけてきています。

個人的には 3 年ほど前から研修会のタイトル（題字）を書かせていただいています。この辺りから、かかわる会の皆様が丁寧に真摯な態度で、物事に取り組んでおられるのがわかってきました。研修会ははじめ、会報・第三者評価・他の団体との合同企画など時間をかけ討議し、行動されるのを外部のものとしてみていました。が、次第にこの会で色々なことを学んでみたいと思うようになりました。

まだまだ、ひとり立ちできる状態とは言えませんが、前向きに精進を重ねてまいります。何卒よろしくお願い致します。

総会記念 講演報告

「早川一光の『こんなはずじゃなかった』」

- 日 時：5月18日（土）14：45～16：30
- 会 場：ひと・まち交流館京都 2階第1・2会議室
- 講 師：早川さくら氏（フリーライター）
- 参加者：56名



NPO 法人きょうと介護保険にかかわる会の2019年度通常総会の後、早川さくら氏(以後さくら氏)の記念講演「早川一光の『こんなはずじゃなかった』」が行われた。さくら氏は故早川一光氏の長女。2016年1月14日～2018年5月31日の間、京都新聞に『こんなはずじゃなかった』を掲載している。2018年日本医学ジャーナリスト協会賞、2019年3月坂田記念ジャーナリズム賞を受賞する。

今回は、タイトルにもある故早川一光氏の『こんなはずじゃなかった』の思いを中心に、家族介護を通してさくら氏のこんなはずじゃなかった思い等も話していただきました。

〈早川一光のこんなはずじゃなかった①〉

講演先で急に倒れ人生初めての入院を経験する。早川氏の頭の中には、具合が悪くなったらバタッと逝くイメージが強く、入院することは思いもよらぬことであった。突然患者を診る立場から診られる立場(患者)を初めて経験し「こんなはずじゃなかった」という言葉を発する。退院後、妻と2人静かな元の生活をイメージしていたが、退院と同時に介護サービスが開始となる。早川氏は、家族介護で何とかなると思っていたが他人が家に入るようになる。こんなはずじゃなかった。

〈早川一光のこんなはずじゃなかった②〉

在宅療養が開始となり「夜が怖い。病魔と老いに責められてきて全然寝られへん。さみしい」と訴える。子や孫との同居により6人のにぎやかな生活になったにもかかわらず、その後も「さみしい、怖い」を訴え「この気持ちわかるか」と何度も家族に聞く。「年取ってこういうことや」とつぶやき、こんなはずじゃなかった。

〈早川一光のこんなはずじゃなかった③〉

「在宅療養はほんまに天国か。病気になっても畳の上での養生・往生を目指して西陣でやってきたが、ほんまに良かったんやろか。サービスを利用して家でのことは、家族が犠牲になっているのではないかと。若かりし頃「楽しく老いる」と言っていた自分に怒りを感じていた。実際は「楽しく老いることなんかできるか！」こんなはずじゃなかった。

〈早川一光のこんなはずじゃなかった④〉

上記③の自分が言ってきたことは間違っていたのではないかと考えたが、今の現状がおかしいと結論付ける。そのため、外部に精力的に発信するようになり、「こんなはずじゃなかった」から「これじゃあかんやろ」と考えるようになる。

これじゃあかん①医療界に物申す

もう年だからという病名はない。目や耳が老化により低下してくると加齢として片づけられるが、そ

の部分だけを見るのではなくその人を見てほしい。そのうえで寄り添ってほしい。

これじゃあかん②介護保険制度に物申す

介護保険制度は出来上がったものを上から押し付けてくる。利用者に合わせてほしい。誰にも当てはまる介護保険制度は誰にも当てはまらない制度である(早川氏の主治医の言葉引用)。利用者を中心に考えて欲しい。

これじゃあかん③宗教界へ物申す

医者だけが人の死を扱えるものではなく、その人に関わった人がみんなてかかわるものである。人の死の場面にのみ関わるのではなく、生きている段階から宗教家に関わってほしい。また、死を考えている人に寄り添って死をくい止めて欲しい。

これじゃあかん④今後について

自主・自立・自営の医療を目指すためには、人間を総合的にとらえる必要がある。そのために教育と医療がタッグを組んでやっていきたい。

〈家族にとってこんなはずじゃなかった〉

病院のシステムを誰よりも理解しているにも関わらず早川氏が入院時に、「忙しい看護師を呼びわけにいかん、僕は家族に見てもらおう」と言うので、家族が付き添い1時間以上ひとりで病室にいることはなかった。他人に世話をされるのが嫌だという思いと、さみしがりやでわがままな性格だとさくら氏は分析をしています。また、ずっと付き添っているから分かることもあったそうで、入院後しばらくして夜間せん妄が現れ、プツと笑えるような症状もあったそうです。最後のほうの入院では「死にそうになったら退院する」が条件だったと、家族介護者側からのこんなはずじゃなかったを教えていただきました。

早川氏のご冥福をお祈りするとともに、早川氏の「これじゃあかん介護保険制度」の部分において、利用者視点にたった利用者のための介護保険制度になるよう今後の活動につなげていきたいと改めて感じた有意義な時間でした。(笠原あけみ 記)

第97回
研修会
報告

施設見学会

社会福祉法人くらしのハーモニー
サービス付き高齢者住宅 ハーモニー東風館

日時：4月20日（土）13：30～16：30
見学地：宇治市木幡金草原
参加者：13名



地下鉄六地蔵駅に参加者13名が集合し、社会福祉法人「くらしのハーモニー」理事長の長田侃士さんと職員の方に、閑静な住宅地に位置する「ハーモニー東風館」（以下「東風館」という）まで送迎していただきました。館内を案内していただいた後、館長の宮本崇義さんから説明を受けました。

建物は、西側に茶畑が広がる傾斜地を利用した三層構造（地下1階、地上2階建て）ですが、外観は3階建てマンションです。エントランスフロア（B1F）は厨房・食事室で、季節のイベントや食事会、趣味の活動など様々な用途に利用できる共用空間となっています。

総戸数37戸（単身者用28戸、夫婦世帯用9戸）の住戸フロアは、1階と2階で住居面積は、20.65m²～41.30m²の規模で、各戸には、バス、トイレ、ミニキッチンと洗濯機スペースがあり、ベッドサイド・トイレ・浴室の3カ所に非常通報装置が設置されています。

また、共有空間として1階にはホール・図書コーナー・和室・喫煙室、2階にはラウンジ・喫煙室・屋上ガーデニングコーナーが設けられています。

「サービス付き高齢者向け住宅」は、有料老人ホームの「利用権方式」とは異なり、賃貸借契約を結んだ入居者の「自宅」で、安否確認と生活相談サービスの提供が必須条件です。また、健康の維持増進や食事提供を始めとする多様なサービスを受けることができます。

但し、介護保険と医療保険のサービスについては、外部の事業所と個別に契約して、利用することになります。利用にあたり、「東風館」の職員が責任を持って相談・調整する体制が組まれています。

現在、入居者は、予約も含め41名で満室です。入居者の平均年齢は、83.4歳（65歳～96歳）、平均介護度は1.2（自立の人～要介護4まで）、入所前の住所地は、近隣の方、家族が近隣の方、インターネットやケアマネジャー経由の方、それぞれ3分の1という割合です。入所時に住民票を異動されます。

職員は、常勤3名、非常勤7名体制で、夜間（宿直）は1名体制で22時と翌朝6時に見守り巡回を行なっていますが、体調の悪い人や本人や家族からの申し出がある場合を除き、外からの確認となります。緊急時には、電話対応で法人内の他事業所に依頼する体制を組んでいます。食堂は、直営で運営しています。

費用は、一人当たり20万円/月程度。新聞・雑誌は個人購読です。

現在、介護サービスの利用状況は、デイサービスは平均して毎日約10名、ヘルパーの派遣は約30人が主に入浴・掃除・買い物支援などのサービス提供を受けています。

「東風館」での看取りについては、開設して2年余の間に最終的には病院で亡くなられましたが、2人の看取りを行ないました。これからもしっかりと看取りを行える体制づくりに努めていきたいと考えています。

入居されて日々の生活に刺激を得たことで介護度が改善された方もおられます。

外出は自由ですが、万一のことを考慮して、帰宅予定時間を記入のうえ、外出していただいています。

最後に質疑の時間があり、「サ高住」の選び方は、費用やハード面だけではなく、運営母体の法人の理念や姿勢、ソフト面がいかほど大切であるかを知ることができました。私たちが近い将来に直面する「終の住処」の選び方について、とても参考となる研修会（見学会）でした。

（伊藤博敏 記）



第 98 回
研 修 会
案 内

あなたの年金はどうなる？

ゆれる社会保障制度！ 年金裁判ってなに？
現状やこれからの課題を学びます



日 時 6月15日(土) 13:30~16:30
場 所 ひと・まち交流館京都 3階第5会議室
講 師 唐鎌 直義 氏(元立命館大学産業社会学部教授)
参加費 会員 300円 一般 500円

先生は日本における高齢者の生活実態と社会保障の課題を長年にわたって研究テーマとされています。年々下がる公的年金額、女性の低年金、若者の抱える将来不安等々現状や社会保障制度の課題を話していただきます。講演後みんなで意見交換をしましょう。皆様の参加をお待ちしています。

第 99 回
研 修 会
案 内

日 時 7月20日(土) 13:30~16:30
場 所 ひと・まち交流館京都 3階第5会議室
テーマ 上京区におけるデイサービス事業の実状と展望(仮)
講 師 有限会社デイジー・ヒル取締役社長 本浪 尚氏

第 100 回
研 修 会
案 内

第100回記念の研修会をむかえることとなりました。

日 時 9月28日(土) 13:30~16:30
場 所 ひと・まち交流館京都 3階第5会議室
講師は元立命館大学院教授 団 二郎氏に決定 お楽しみに！

新入会員紹介(5月 入会)

正木 隆之 さん

編集後記

PCやインターネットの発達によって私たちの暮らしは大きく変化しました。今ではメールをしたり、ググることがない日なんて病気で臥せているか、Wi-Fiのない特別な環境にいるときだけというのが、私の日常です。ちなみに、AI(人工知能)やロボットの更なる発展によって、人間の仕事の多くが奪われるといった恐ろしいような未来予想も喧伝されています。

一方、介護の分野ではAIやロボットを要介護者の見守りやメンタルヘルスケア、介助者のサポートに利用するための取り組みが進められています。AIでケアプランを作成するのも、もうすぐかも。世の中が大きく、急激に変わっていくことは確かでも、その変化の中身や行方がもう一つ見えない、分からないことが今の私のストレスです。まずは「AI」とは何か、それが人間にもたらす影響を知りたいと、大それたことを考えています。ローマ字読みでは「アイ」「あい」「愛」…。それを知ることの方が、もっと大切なのかも知れませんが。 M・F

